

手ほどきスワッピングで

墮とされた私

小説 木森山水道（夜山の休憩所）

「ご挨拶」

この度は、DL・ご観賞くださいますして誠に有難うございます。
本ファイルは、2012年8月に追加いたしましたおまけシナリオです。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」

体験版の挿絵はモノクロですが、製品版はカラーとなっております。
この他に違いはございません。

「ご注意ください」

- ・PDF閲覧ソフト（Adobe Reader 7と9と で確認済み）によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・本製品はフィクションです。個人の範囲でお楽しみ下さい。

挿絵はメーカー様の利用規約に基づいて

- 「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」（G・J?様）と、
 - 「セックスライフ」（G・J?様）を利用して作成しました。
- 尚、当サークルはG・J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

目次

第五・五話 ウブな彼の浮気心

.....

3

主な登場人物

八幡玲奈 二十歳。美奈の姉である女子大学生。美人でふしだらな性格。

富山誠一 十八歳。美奈の幼馴染。大学入学を機に告白し、美奈の恋人となる。

八幡美奈 十八歳。眼鏡をかけた美人女子大学生。眼鏡をかけている。

東都勇二 二十一歳。玲奈の恋人である大学生。浅黒い肌のハンサム。金持ちの息子。

2

第五・五話 ウブな彼の浮気心

(ゴク……………悪い美奈……………お前の姉さん、エロ過ぎて我慢できないんだ……………)

富山誠一は胸中で恋人に謝罪した。

約束の時間が近づくにつれて早まっていた鼓動はピークにさしかかっており、カラカラに渴いた喉の奥から飛びだしてきても不思議ではない。

最も悩ましいのは男のシンボルだった。

ストラックスの中でパンパンに膨らみ、股間部分に大きなテントを形成している。天井から押さえつけられている肉棒は、全体的に鈍く痛み、同時に酷く疼く。

ズボンを脱ぎ、目の前の美女をダシにして自慰に耽りたいという強烈な衝動を抑えるだけでも相当な労力だった。

「ウフ、なあに、誠一くん。そんなにわたしが欲しかったの？」

八幡玲奈は目を細め、からかうように言う。目を合わせるだけで達してしまいそうな妖艶な眼差しは誠一の意識を一瞬白ませ、唇を張らせた婀娜っぽい微笑は背筋に妖しい寒気を起こした。

恋人の姉は今日も派手な服装だった。

バラ色の上着は、地肌にピッチリ吸着する極薄のウエットスーツじみている。露出度の高いデザインをしており、肩と鎖骨、ひっかき傷のようなお臍が剥き出しになっている。

肌は雪肌で染み一つない。まるで絹のような滑らかさで、青白い室内照明を反射して白く輝いている。

「しょうがない子…………… 本当にスケベなんだから」

玲奈がクスクス笑う拍子に、並外れた豊胸が小さく震えた。

横倒しした釣り鐘形の豊胸は、天井からピアスノ線で吊られているかのように突出している。男を挑発している風な佇まいは、正面から揉みただけと言っているとは思えない。

窄まった脇腹、脂肪ゼロと言われても納得できる薄い腹部は乳房の豊満さを際立たせている。

上着と同様に薄い生地のマイクロミニは、膝に行くほど細い太腿を大いにひけらかし、胸のように充実して後ろに突き出ている尻タブの輪郭をクッキリ浮き上がらせていた。

ブレスレットやアンクレット、身に付ける煌びやかな装飾品は綿密な計算の上で配置し

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】



第五・五話 ウブな彼の浮気心

ているのだろう。男好きする媚体が余計に魅力的に見える。

玲奈は顔も端麗だった。

金色に染めた長髪の側面は白い細リボンで纏められ、眉は柳のように細く、目鼻口の配置は一流女優のように均整がとれている。美顔には牝としての自信が満ちており、自信家特有の凛々しさが滲んでいる。

恋人の姉は、街を歩けば振り向かない男はいない、色香に満ちた美女であった。

「いいわよ……わたしは今あなた女なんだから、今夜もたつぷり楽しみましょ……はじめは、いつもみたいにオツパイを揉んでくれるかしら……」

淫蕩に粘った声が、誠一の自室に染み渡った。聞いた誠一の頭がじいんと痺れ、心臓の鼓動が加速する。既にギチギチだと思っていたのだが、ズボンの中のペニスが一回り大きくなった。

「は、はい……今日もよろしくお願いします……玲奈さん……」

玲奈は両手を頭の後ろに組んで胸を反らす。背筋をピンと伸ばしている美女の豊胸がパンチングボールのように弾み、定位置に戻る。誠一は、無抵抗を示す美女の正面に立つ。

あと数センチでも摺り足をすれば、股間のテントが玲奈の股間に触れるという距離であった。

（ホントすまん美奈……でも、お前だって勇二さんに抱かれてるんだろ……？ ならおあいこだよな）

弁解めいたことを胸中で呟く誠一。恋人がいない場所で、恋人の姉と性行為をすると意識すると、胸がチクチク痛む。

だが、その痛みは行為をやめるストレスにはならない。反対に、背徳性交への浅ましい期待を強める媚薬でしかなかった。

富山誠一には八幡美奈という恋人がいる。歳は同じ十八歳。一緒の大学に入学したのだが、元々、幼い頃から知っている幼馴染みであった。

目の前の玲奈は、美奈の姉である。

つきあい始めたものの、性生活に暗雲が見え隠れしていた誠一と美奈は、ひよんなことから玲奈とその恋人の勇二とスワッピングをすることになった。

慣れたカップルと慣れないカップルでパートナーを交換し、経験を積むのが目的だった。ウブなふたりは目を白黒させたものだが、性生活が上手くいかないために破綻するカッ

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

ブルが少なくないと聞かされては、誠一も、眼鏡をかけた生真面目な美奈も承諾せざるえなかった。

恋人以外の女性、しかも彼女の姉と性行為をすることに初めは戸惑いを感じていた誠一も、今ではすっかり玲奈の虜になっている。

美奈への想いが冷めたわけではないのだが、心の底から玲奈との蜜時が捨て難いと思っていることも事実であった。

ムニユウウウ、ムニユツ、ムニムニ。

「んっ……んふう………はああ………いいわ、誠一くん、上手よ………んはあ」

誠一は馬のように鼻息を荒くしながら十指を広げ、突き出る乳房を鷲掴みにしていた。

薄布を隔て、手指や手のひらにやや高い体温が伝わってくる。

おずおずと指に力を込め、乳肌に指を食い込ませては、ふっと力を抜いて乳房の弾力に弾かれるということを繰り返す。

「はあっ………はあ………あああ、この感触………！」

玲奈の肉釣り鐘は何度も揉ませてもらっているが、まったく飽きない。

ゴム鞠を揉みしだく感触に近いだろうか。指を突き立てれば抵抗し、内部にいくほど強

くなる。

一度揉むだけで、蕩けてしまいそうな快感が手指に満ちる。手のひらがじいんと痺れ、握力が急速に失われていく。誠一には、それが酷く甘美だった。牡心が求めるままに、甘い脱力を伴う魅惑的な胸揉みを何度も何度も繰り返す。

誠一の指の周りには無数の小皺が生じ、今も増え続けている。しつこく揉まれる乳玉の体温は、ゆっくりと上昇している。新品同様の服に皺をつけられている玲奈は、呼吸を官能的に湿らせながら、若男の好きなようにさせていた。

「ああ、オツパイ気持ちいい………どう、わたしのオツパイ………百二センチのJカップなんです、AV女優でもそういないわよ？」

「はい、玲奈さんの百二センチJカップオツパイは最高です………はあ、はあ」

玲奈は得意げに口角を吊り上げた。

サイズを耳にし、口にした誠一の股間には、さらに血が流入した。乳房を揉みしだく手のひらが甘美に痺れる一方で、パンパンに膨れ上がった肉棒はズボンに圧迫されて痛みつつ放しなのだが、乳房を揉みしだくのはやめ難い。「褒めてくれて嬉しいわ………ねえ見て、誠一

第五・五話 ウブな彼の浮気心

クン、わたしのオツパイの先っぽ……んふう
……はあ……」

揉まれて膨らみ始めた乳房の頂は、ぷつくり起きあがっていた。小指の先大に腫れ上がり、紙の厚さのウエットスーツを自分の形に押し上げている。

玲奈が漏らし始めた惱ましい吐息は、胸を揉まれる快感だけでなく、乳首と布が擦れる快美も原因かもしれない。

「乳首、ですね……はあ、はあ、今日もノーブラで来たんですか？」

玲奈は、自分の肉体に絶大な自信を持っている。

昔は妹に似て真面目だったのだが、大学に入ってから自分の魅力をひけらかすはしたない性格になったと美奈が悲しんでいた。

だから、抜群の女体を派手な格好で大盤振る舞いすることも厭わない。男の欲望視線で視姦されても、誇らしく思うタイプなのだ。

仮に往來で乳首が勃起しても、挑発顔で胸を反らし、見せつけながら歩いたことだろう。

「乳首も弄ってえ、オツパイを揉まれるだけじゃ物足りなくなってきたからあ」

すり寄るような甘え声でねだりながら、玲奈は胸を前後に揺らす。緩慢な振幅は、鷲掴

みにされている乳房をゆったり弾ませた。生地裏と擦れあう乳首が、愛撫を催促するようにピクピク震える。

「わたしのいやらしい乳首、気持ちよくしてよお……」

胸揉みだけでは満足できなくなったらしい美女は、潤んだ瞳で誠一の目をじっと見詰めてきた。

誠一の心臓がひっくり返ったように弾んだ。魅力的な女性のおねだりは断れるはずがない。誠一は言葉でなく、親指と人差し指で乳首を摘むことで応える。

コリユ……コリコリコリコリ……コシユ
コシユ……

鏡合わせの挙措で両乳首を刺激する。弾力を確かめるように軽く潰し、力加減を変えながら乳首を扁平にひしやげさせる。布に覆われていることを計算し、指の腹で強めに表面を擦る。

グミのように弾力の強い乳首を刺激すると、引きつった震えを返してくる。玲奈はぽつりした唇から艶やかな吐息を吐き出しては、小鼻を膨らませて鼻息を吐く。

「いいわ、気持ちいい……ああん……くふうン……乳首、気持ちいい……！」

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

玲奈の背中が軽くのけぞり、乳房が余計に押し出された。

手のひらで覆う肉釣り鐘は炙られているように熱くなっている。ピッタリスーツが覆わない鎖骨の周辺はほんのり赤くなり始め、よく見ると微細な汗の玉が浮いていた。

「はあ……はあ……玲奈さん……玲奈さん……っ！」

美女が淫らに反応してくれている様子は誠一を大いに興奮させた。

早鐘を打つ心臓は小動物の物に変化して、次の瞬間に破裂してもおかしくないほど拍動している。喉の渴きも最高潮を越えていた。

玲奈から離れてクールダウンした方が身体のためなのだろうが、誠一は性行為をやめようとしなない。心臓の鼓動を鎮めるよりも、喉の渴きを癒すよりも、ペニスを突き立てたい。そんな思いで一杯だった。

ツン……ツンツン……ズリズリ……ズリズリッ。

誠一は、ズボンのテントの屋根を玲奈の股間に擦り付ける。胸愛撫だけでは我慢できなくなつた狂おしい欲望を、浅ましい行動で満たそうと躍起になっていた。

「あんっ……ウフ、もう我慢できないの誠一

クン」

「し、したいです……」カップオツパイを揉んでるだけじゃもう……はあ、はあ、チンポで気持ちよくなりたいです……！」

「ふふ、素直ね。いいわ、服を脱いでベッドに仰向けになつて」

パツと顔を輝かせた誠一は、素早く衣類に手をかけた。

あつという間に全裸になつてベッドに寝そべり、玲奈をギラギラした目で凝視する。

玲奈は婀娜っぽい微笑みで応え、アクセサリーを外し始めた。

アクセサリーを取り払うと、トップに手をかける。極薄生地が取り払われると、肉釣り鐘が量感たつぷりに転げ出た。

ボヨ~~~~ンン……ボヨツ、ボヨボヨボヨ……。

布地に覆われていた乳肌 元から露出していた乳房の根本を除いた部分 は砂粒大

の汗の玉を無数に浮き上がらせている。鎖骨の周囲以上に赤みが差していて、桜の花びらを思わせる色彩であった。

発情し、蒸れた乳房からはムワンと牝の香りがくゆっている。鼻にツンとくる汗の酢酸

臭と、希釈した砂糖水のような仄甘い香りの

第五・五話 ウブな彼の浮気心

混合臭を嗅いだ誠一の肉棒は、歓喜するよう
に大きく震えた。

「お待たせ。それじゃあ……フェラしてあげ
る……」

玲奈は最後に、髪を束ねていた白いリボン
を解いた。シユルリと言う微かな解放音と共
に、長い金髪がふわりと落ちる。束ねられて
いただけに、鎖骨の前に垂れるほつれ毛の束
は、緩いウエーブがかかっている。

髪を解いただけだったのだが、ただでさえ
色っぽい美女の色香がグンと増した。若娘の
生命力を滲ませていた美貌は、今では女盛り
の熟れぶりを見せている。

誠一がゴクリと生唾を飲んだ音が、部屋の
中に響き渡った。

「じつくりしゃぶってあげるわね……」

欲望の熱視線を浴びせてくる誠一に、玲奈
は悪戯っぽく口角を吊り上げる。

マイクロミニは脱がず、トップレスで止ま
った長髪の美女は、仰向けの誠一の股間にす
がりついた。

「んふう、おつきい……硬く腫れて……ビク
ビクしてる……」

玲奈は腹這いになり、肩幅に開かれた誠一
の逞しい太腿に乳房を乗せる。豊胸の上乳は、

潰れた風船のように盛り上がりながら深い谷
間を見せていた。

しなやかな背中への向こう側では、マイクロ
ミニの薄生地を破らんばかりに盛り上がった
いる尻タブが並んでいる。玲奈も足を肩幅に
開いているのだが、太腿の脂の乗りがよすぎ
るために、内もも同士が軽い押しくら饅頭を
していた。

自身の腕を枕にしている誠一は、うつ伏せ
の玲奈の女体の表情を目でひとしきり楽しむ
と、亀頭に近づく玲奈の朱唇を凝視する。

「スンスン……んふう、牡臭い……いい匂い
……」

唇と亀頭がくつききそうなる距離までくると、
玲奈はピタリと静止して、小鼻を膨らませた。
剥けた亀頭が放つ甘酸っぱい牡臭を胸一杯に
吸い込むと、嬉しそうに目の下を紅潮させる。

少しの間鼻息を響かせた後、玲奈はピンク
色の舌を突き出した。大きく開かれた唇の間
からは、熱くて湿った吐息が吹いてきて敏感
な穂先をくすぐった。

両手のひらが肉棒の根本に添えられて、玲
奈の方へと少し倒された。陰毛は綺麗に剃っ
ているので、やや高い手の体温も、細い手指
の感触も股間に直接伝わってくる。

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

「あゝむふう……チロ……ぺろぺろ……」
軽く舐められた頂上が、ビクツと大きく跳ねた。

「おおおっ……れ、玲奈さんの舌きた……チンポ舐めてる……！」

唾液でぬめり、室内灯を反射して鈍く輝く舌は、続けざまに亀頭の先端を撫でてくる。美女の唾と、プリプリした舌の感触が男のシンボルに擦り付けられる度に、快感電流が背筋を駆けていく。

美女は一片の躊躇いも見せず、まるでソフトクリームを舐めているかのような自然さで舌を使っていた。頬の桜色が濃くなっていく様子が、男根を舐めて興奮していることを伝えてくる。

「あふう、れるれる、ちゅぷっ……レロレロレロ、チュ……ンふうン……ビクビクして……可愛い……れるっ」

玲奈の舌使いは徐々に勢いを増している。亀頭の先を唾でべちよべちよにすると、今度は啄むキスを繰り返してきた。

甘い重量感が亀頭に降る度に、腰の奥底で待機するマグマが活性化していくのを誠一は感じた。

キスが終わると、今度はぼってりした朱唇

を亀頭の中腹に食い込ませ、掃除機のように吸い上げ始めた。

下品な音を立ててバキュームしている最中には、舌が亀頭の先端を舐め回す。

誠一のペニスはどんどん熱くなっていく。

肉棒の体温は腰に伝播し、腰の内側は官能的な甘い痺れの坩堝になりだしていた。

「れ、玲奈さん、もつと、もつと深く……」

……先っぽだけじゃなく、チンポぜんぶしゃぶって……！」

亀頭の先だけ刺激されるのでは物足りなくなつた誠一は、情けない上擦り声で哀願した。

「ちゅぽんっ……いいわよ、誠一くん。もつと気持ちよくしてあげる」

口から離れた肉棒が、へそに向かって反り返る様を嗜虐的な眼差しで見届けると、玲奈は首を伸ばして亀頭に再度かぶりついた。今度は手は添えていない。

亀頭を啜えたまま、手前に肉棒を少し倒し、

「ジュブブブ……んぐっ……ンふう……ジュル……ふうン……ほんなにかはく……」

……おおひくなっへ……じゅぶぶぶ……」

ペニスを迎え入れる。熱り立つ肉棒が、ゆつくりと玲奈の口内へと消えていき、唇をくぐつた牡棒部分が温かな包容感に包まれる。

第五・五話 ウブな彼の浮気心



手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

玲奈は、亀頭の先を咽頭に触れさせると同時に唇と肉棒の麓を密着させた。そのまま舌先でペニスの付け根を舐め回すと、今度は頭を持ち上げていった。

頬を凹ませ、唇を強く締めている。ペニスの表面にガツチリくいつく唇は、温かくぬめった口内粘膜と共に、蕩けてしまいそうな拘束感をペニスに与えていた。

「チンポが……玲奈さんの口をいつたりきたりして……ああっ、気持ちイイ……！」

誠一は、自分の肉棒が美女の口の中にゆっくり吸い込まれ、唾液塗れにされてから剥き出しになっていく様に釘付けになっていた。

唾液塗れの肉棒はパンパンに膨れ上がっている。

経験を重ねて黒ずみを帯び始めた竿部は、青い血管をドクドク脈動させ、破裂寸前の緊張を滲ませている。

「うつく……おあ…………でる……ああッ……でるウー！」

トロ~~~~~ツツツ。

肉棒の先に漏出感を感じ、丁度、玲奈の唇が亀頭の頂上まで引き上げていた刹那、伸し掛かる唇を押しつけるように鈴口から半透明の汁が溢れた。赤みが増した朱唇に灰白く染

みをつけると、竿を伝って根本に降りていく。

先走り汁の第二陣、第三陣が尿道を逆流してくる気配が続けて近づいている。と、

「チュプ~~~~~！んふう……チュルルルウウウウウウウウ！」

「お、おああっ、す、吸われる！カウパーが吸われてるウウウ、んああッ！」

玲奈は先走りを漏らす鈴口に唇で噛みつき、肺活量の限りに吸い上げた。尿道を進んでいた苦しょっぱい汁はたちまち美女の口内に引き上げられ、喉奥に流し込まれる。誠一の体液は玲奈の食道を通り、胃の粘膜に染み入っていく。

呼吸は鼻だけで行い、唇を亀頭から片時も離さない玲奈。スツポンのように食いつきながら、貪欲に牡の汁を啜っている様子は、喜んでしている風にしか見えない。

「うわっ……ち、チンポも汁もどんどん吸われて……玲奈さんの喉を、カウパー通り過ぎて、くあッ……！」

自分の汁を吸い飲まれる多幸感と、ペニスを貫く吸引快感に、誠一は腰を浮かせてわなないている。両手は宙空でグーパーを繰り返して、豊胸が乗るスポーツマン系の太腿はビクビクと痙攣していた。

第五・五話 ウブな彼の浮気心

みつともなく乱れる誠一を、玲奈は余裕たつぷりの上目遣いで見詰めている。尿道を上がってくる先走り汁を、ゴクツ、ゴクツと飲み下しながら。

「チュポン……フフ、だんだん味が濃くなってきたわよ？ そろそろ射精しそうね。いきたい、誠一くん」

親しげと言うよりは、女帝のような口調に変わっていた。男を弄び、支配する夜の女王の声音である。

「イきたいです……このままフェラでイかせてください……！」

散々吸われたと言うのに、先走り汁は次から次へと溢れてくる。口淫の快感で炙られた肉棒が、射精快楽を求めて泣いているかのような光景だった。

射精したくて堪らなくなっている誠一は、恋人の姉に子供のように率直にねだる。

「いい子ね……じゃあ、イかせてあげる。わたしの胸でね」

「え……胸で……！」

最後の一言が、射精欲求で霞んでいた頭を一気に沸騰させた。

玲奈のバストは百二センチのJカップ。何度揉んでも勃起せずにはいられない極上の乳

である。例えしらふであつても、ペニスを挟んでくれると聞かされた途端に下半身がカツと熱くなり、目眩く乳悦のことしか考えられなくなる魔性の代物なのだ。

しかも、玲奈はフェラ天才だけでなくパイズリもすこぶる上手い。両手で数え切れない回数しても、まったく飽きさせないパイズリ技巧者であった。

「ほら、上体を起こして……いつも通りにね」「はい！」

誠一は素早く起き上がり、ベッドの縁に腰掛ける。太腿を大きく開くと、ベッドを降りて床に跪いた玲奈が割り込んできた。

「ふふ、欲望に正直なんだから……いくわよ？ 百二センチJカップのパ、イ、ズ、リ」
たば~~~~~つつつ。

玲奈は、いわゆる手ブラの格好で乳房を掴み、十指を軽く食い込ませながら、胸板がすつきり覗くまで左右に広げた。

谷底はすっかり汗ばんでいて、無数の汗の玉を浮かせている。閉じこめられていた熱気は汗と体臭と共にくゆり、誠一の鼻腔を突く。生々しい牝の匂いを嗅いだ誠一の肉棒は大いに興奮し、物欲しそうにビクビク震えた。

「まずは、元気なチンポを胸の奥でガツチリ

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

受け止めないとね……」

身を乗り出して勃起ペニスを胸元に抱え込んだ後、玲奈は両乳房を定位置に戻す。

肉棒の裏筋は玲奈の胸板と密着して体温を交換しあい、百二センチJカップの乳房は肉棒めがけて押し寄せている。

「くっ……はぁッ……！」

昂ぶる乳房の熱感。触れているだけで腰が溶けてしまいそんな乳肌の柔らかい肌触り。三百六十度からぎゅうぎゅう押しってくる乳玉の重量感。

辛うじて亀頭が抜け出しているだけに、乳房ですっかり困われた肉竿の快感は際立っていた。

乳房で包み込まれる快感は太腿を淫らに震えさせ、腰の内側を過熱する。肉棒の根本ではドロドロした射精衝動が滾る一方だった。

「ソフ、いつでも好きな時にイっていいわよ」ムニユリッ、タップ、ムニユムニユウ、シユコシユコ。

手ブラ風に掴みつつ、腫れ上がった乳首を見せつける玲奈は、ゆっくりと乳房を使い始めた。

乳房を前後上下に動かすことで、肉竿を揉みしだく。

柔らかい乳肌は、汗の粘りけで竿肌に吸い付いてくる。肉が詰まった弾力乳房の重量感、乳房に押し潰される悦びをペニスに大いに味わわせてくれていた。

Jカップの豊胸で擦られる肉棒は、焼け付く快感の権化となり、燃えているように熱くなる。

乳肌の海からびよこんと飛び出る亀頭からは、先走り汁がひつきりなしに漏れていて、竿を伝い、蠢く乳肌に向かつて下っていた。

「はぁ……ああ、硬い……ん、ソふうっ、外から押ししてるのに、内側から押されて……ああ、カウパーもこんなに出て……クラクラする匂い……」

乳房で竿部をねちつくく擦り責める玲奈が、甘ったるい声を吐く。

乳房一杯に硬い肉棒の存在感を感じ、恍惚としているらしい。自分の魅力で猛らせた肉棒を淫らにわななかせることに快感を感じている風にも見える。牝の魅力に自身のある女らしい反応だった。

ペニスと乳肌の接着面にカウパーが流れ込むことで、摩擦感はややなめらかになっていく。ぬるぬるした研磨快感が、汗ばんだ乳肌に引っ張られる快感にとって代わる。

第五・五話 ウブな彼の浮気心

まるで肉竿の内部をダイレクトにシゲキサレテイルカノヨウな快楽に、誠一の射精衝動は高まる一方。まだパイズリされ始めたばかりだと言うのに、もう保ちそうになかった。「玲奈さん、出ます！ もう精液出ちゃいます！」

「あん……アンン、いいわ、ああ、いっぱい出して……全部受け止めるから、遠慮しないでわたしのオツパイでイッてッ」

パイズリ奉仕をしている玲奈の興奮も大概のようだ。粘りけのある艶声は、徐々に切迫感を宿し始めている。絶頂する時のあえぎに似た息づかいだった。

ムニユリツツ、ムニチュウ、ムニユチイツツ、ニチャムニツ……。

先走り汁が絡んだ乳房は卑猥な水音を発しながら、ひたすら肉棒を責め立てる。

玲奈は前後に上下にと摩擦方向を変えるだけでなく、擦るスピードも上げてくる。弾力の強い乳房はゼリーのようにブルブル震え、ペニスは全方位から揺さぶられる。換言すれば、振動する乳房でパイズリされているも同然なのだ。

ただでさえ大きな豊胸はパンパンに膨れ上がり、乳肌はすっかり汗みずくだった。どこ

もかしこも室内照明を反射して万華鏡のようにツヤツヤと輝いている。

指の谷間から顔を出す淡褐色の乳頭は、はちきれんばかりに腫れ上がり、射精直前のビクつき亀頭と大差ない。

「さあ、イッて、たくさんザーメン出してっ、わたしのここに一杯射精してえ！」

叫んだ玲奈は、口を大きく開けた。

位置は鈴口の真上であり、射精の射線上である。しかも、少し首を伸ばせば、亀頭を呑み込んでしまえる至近だった。

松ぼっくりのようにぷっくり膨れ上がった亀頭に、玲奈の熱い吐息が吹き付けられ、口内15粘膜から放たれる熱波も存分に浴びせられている。

「うう、イきます、玲奈さん、射精します！」
誠一も首肯の意志を込めて叫んだ。

玲奈に精飲された経験は、一度や二度ではない。

スワッピング開始当初は体液を飲ませるところに躊躇いを感じていたものの、飲ませると喜んでくれるので、今では罪悪感もなかった。

現在ではむしろ、目の覚める美人が自分の体液を嬉しそうに飲んでくれるという魅力的なシチュエーションを積極的に楽しんでいる。

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】



第五・五話 ウブな彼の浮気心

恋人である美奈の姉に精飲されているという背徳感も快感だった。

恋人以外の女性に欲望の丈をぶつけるのは不義理だろう。しかし、そう意識すると心臓が妖しくドキドキし、快感が際立った。

「ああ、イク、玲奈さんのパイズリで……オツパイでチンポ擦られてイクツ、イって玲奈さんの口に精液ぶちまけるツツッ！」

これからしようとしていることを絶叫すると、身体がふつと軽くなり、心地よい開放感に包まれた。それと同時に肉棒はけたたましい痙攣を起こし、吐精した。

ドビュルルルルル！ ドビュルルルル！
ビュビュツ、ビュルルルル！

「あ~~~~ん、あぶウツ、んむああツ、ングううう、へあつ、へはあ」

鈴口から飛び出した粘液の塊は、玲奈の口の周りや頬、髪に飛び散ったが、ほとんどは口内へ飛び込んでいく。

濃厚な栗の花の塊でもある粘液塊は、美女の口内にべったり貼り付き、喉奥に直撃すると、むせかえる汁臭を放ち始める。

「んぐつ……んはあツ、あああ、濃い……ングングツ、はあ、くっさいイ……ペろ、れろ……美味しいイ……！」

しかし、玲奈は嫌な顔一つしない。それどころか、紅潮顔の汗ばみを加速させながら、飛来する精液を処理していく。へばりついた牡汁を舌でかき集めては、唾液を絡ませて派手な嚙下音を響かせた。

新鮮な粘液塊は持ち前の粘りけを遺憾なく發揮し、食道の蠕動に逆らう。牡臭を放ちながら喉の壁に絡みつき、なかなか落ちていかないのだ。

「アア、この絡みつく感じ……ゴクゴクツ、堪んないっ……ザーメン飲んでるって感じ好きイイっ……ふうんア、ああ……ねえ、もっと出るでしょお、レロレロレロ、ジュル~~~~ツ、んくんく……ぷはあつ、んふふ、残ってるのも飲ませてもらうわあ、ジュプププ~~~~！」

射精までの間隔が長くなつてくると、玲奈は尖らせた舌先で鈴口をほじり始める。尿道の残りかすも根こそぎ吸い飲もうという情念がたつぷり込められていた。肉竿をくるむ乳房も前後上下に動かして、ひたすら射精を促してくる。

「アア……もっとほじってください……一杯飲ませてあげますから……ああアアツ」
貪欲に精液を求める恋人の姉を見下ろしな

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

がら、誠一は奔放に精液を吐き出す。

美女の浅ましい求めに対し、臭い粘液の吐出で応えるのは、心臓が痺れる程の快感だった。もっと自分の汁を染み込ませたいという本能的なマーキング願望に従って吐精しては、意識を心地よく途切れさせる。

「ふうあ……ああ……おいしい……んくっ、不味い苦さだけども、おいしい……っ……ああ、本当に濃いイ……」

「はあ……はあ……ああ……」

ふたりは異口同音に熱い吐息を吐き出した。玲奈が身を引くと、肉棒と乳房が離ればなれになった。

今度は室内の気が肉棒を包み込むが、過熱した牡棒は冷えそうにない。

ひとしきり射精したものの、十代の誠一はまだ満足していなかった。

若男の射精衝動はペニスの根本にたつぷり残っている。乳房から解放された肉棒は、物足りなそうにビクつきながら、精液の粘糸を垂らし、斜めに反り返っている。

「ウフフ、まだまだ硬いわね……もっと出したい？」

艶然とした上目遣いで誠一を見やる玲奈。

彼女も同じらしく、瞳は妖しく濡れている。

「はい……まだ出したいです……今度は、玲奈さんのオマンコで……」

パイズリで射精する快感を味わってしまった。もう同じことで気が済むはずはない。

玲奈の膣で得られる快感を知る身では尚更だった。

これまで何度もしてきたように、玲奈の膣でペニスを刺激し、陰嚢に貯まった精子を思う存分放出したくて堪らない。

「わたしのオマンコで……オマンコしたいの……？」

妖艶に口角を吊り上げた玲奈は立ち上がり、その細腕を誠一の胸元に伸ばした。

誠一はされるがままに、ベッドの中央で仰向けに寝そべった。白い粘液を漏らす肉棒が、天井に向かって起立する。

「このオマンコに、チンポを突っ込みたいのね……」

脳に染み込む粘い媚声を紡ぎながら、玲奈は誠一の股間の上に仁王立ちし、ゆっくりとマイクロミニを脱ぎ捨てた。

腰骨に指を滑らせ、ショーツをずり下ろしていく時には、陰部とクロッチが発情粘糸でしつこく繋がっていた。

まったく触れられてなかったというのに、

第五・五話 ウブな彼の浮気心

玲奈の秘裂は淫らな汁を滲ませていたのだ。乳房や乳首を弄られ、フェラチオとパイズリをしている内に、股間をいやらしく濡らしていた以外に考えられない。

「ゴクリ…… ああ、はい…… はいっ、玲奈さんのオマンコに…… チンポを…… 突っ込みたいです……！」

スカートとショーツで封じ込められていた甘酸っぱい性器臭は、仰向けの誠一の顔面へと流れ、包み込む。

陰部を熱視しながら生々しい牝臭を嗅いでいると、それだけで肉棒がピーンと突っ張ってしまい、残り汁でなく精子満載の白濁を漏らしてしまいそう。

丹念にヘアが処理された陰部は、流水で剥いたゆで卵のようになめらかだった。

大陰唇は、ぼってりした玲奈の唇に勝るとも劣らない肥厚ぶりで、舟底を描く股間の頂で突出している。乳房の頂上で腫れ尖る乳首を連想させる光景だった。

陰部の入り口は指幅に開いており、バラ色の小陰唇が微かに嵌みだしている。女に不慣れな男ならばグロテスクに見えるかもしれないが、セックスに慣れた誠一には酷く魅力的に見え、その心情を代弁するかのよう、勃

起ペニスが勢いよく背伸びした。

「うふ、いやらしい子。恋人の姉のオマンコと一つになりたいなんて……でも、いいわ。素直な子にはご褒美をあげるべきだもの」

恋人の存在を指摘され、一瞬胸を突かれたが、腰を跨ぐ股間が落下してくると綺麗に霧散した。

膝立ちの玲奈は豊満な尻タブをゆっくり降下させ、テラテラ光る陰部を近づけてくる。

尻の下降に伴って、ムッチリした太腿が開いていき、秘裂の綻びは倍になった。

肉土手の間から小陰唇が顔を突き出し、内部で分泌されている愛液がその先端に集まり始める。

「ぴちゅん……じわああああ。」

「ううっ……！」

愛液が滴となって落下した。欲望で膨らんだ亀頭の鈴口に落ちると、まだまだ赤みの強い肉面に沿って落ちていき、肉竿を伝って無毛の根本へ向かう。

性感に敏感になっているペニスには、たったそれだけでも快感で、誠一の太腿が粘つくこく痙攣し、腰が一瞬浮き上がる。

「さあ、食べちゃうわよ……あなたのお姉さんが、チンポ呑み込んでうわよ。」

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

「ああああ、た、食べてくださいッ、玲奈さん、チンポ呑み込んでくださいッッッ」
恋人の美しい姉は、たまにしつこく罪悪感を煽ってくる。

玲奈とのスワッピングセックスは参加者の合意に基づくもののだが、言葉で煽られると後ろめたさが大きくなる。

しかし、だからといって、折角の本番セックスをやめてしまうつもりはなかった。愛液で濡れたペニスの疼きは限界に達している。一刻も早く玲奈とひとつになつて悦楽を貪りたいという浅ましい欲望が頭の中を席卷しているのだ。

「そう、そんなに呑み込んで欲しいの……ほうら、お望み通り、姉オマンコがあなたのチンポを食べちゃうわよお」

じゅぶうううつつつ……！

「お、おああつ、くうああッ……！」

秘裂から突出していた濡れ肉ビラと亀頭の穂先が接地した次の瞬間には、カリから上はすっかり呑み込まれていた。

愛液でぬめる膣ヒダが、熱り立った亀頭の全面に絡みついてくる。ペニスに負けない位に熱くなっていることが、玲奈の興奮を明確に示していた。

「んふう……ふうつ……ああ、いいわ、妹の彼氏のチンポ、大きくって硬くって、すごく美味しい」

鼻筋から汗の玉を落としながら、玲奈は喜色満面で誠一を見詰めている。

「今、根本まで食べてあげるわね」

ジュツププププウウウウ……！

「くっはああアアア！」

宣言通り、玲奈は一気に腰を沈めた。溢れる愛液が肉竿を濡らし、濡れた肉竿はすぐに膣に呑み込まれていく。

「んっ、ンフフ、全部呑んじゃったあ……んふ……」

玲奈は誠一の太腿にお尻を置いている。肉径の形に広がった入り口は、ペニスの麓と密着していた。

膣内はペニスの表面全体に纏わり付いている。肉棒の至る所が、膣のぬめりと熱さと柔らかさを擦り付けられ、女と合体した実感を思い知らされていた。

精液を吐きたくてウズウズしていた牡棒は、間断的に突っ張る。熱い汁をピュルリと漏らし、魅力的な膣内に自分の汁を染み込ませる。

「す、すごいっ……気持ちいい……！」

玲奈との本番セックスは何度も経験してい

第五・五話 ウブな彼の浮気心

るが、まるで初めて一つになったかのような新鮮で魅力的な快楽を覚える。何度味わっても飽きない膣は、恋人を裏切っても甘受する価値があると、誠一は本気で思った。

「あはっ……あなたは食べられるんだから、何もしないでわたしに全部任せるのよ……いつでも、好きなだけ射精していいから……彼女の姉のオマンコに、精液をたくさん飲ませなさい……んっ……」

軽く上体を倒し、うなじにかかる長い髪をかきあげる玲奈。

鎖骨の前で揺れる後れ毛の先では、淫らに腫れ上がった乳首が小刻みに振幅していた。台座の乳輪も、土台の乳房もパンパンに膨れている。

「メートルオーバー」カップの肉釣り鐘は、ぶどうの房のように垂れ下がっている。重力に引かれても型崩れせず、まるつきり逆さ吊りの釣り鐘であった。

全面的に汗みずくとなつて乳肌はキラキラ輝いていて、癖になる膣に劣らない魅力を醸していた。

「オマンコでズリズリするわよお……んっ……ああ、擦れる……んふっ、んっ、んっ……じゅぶううう……ぬちゅうううう……じゅ

ぶぶぶぶぶ……。

ゆっくりした抜き差しが始まった。

玲奈はベッドに膝とすねをつけ、誠一の胸に手を置くことでバランスをとり、そして結合部を上下動させている。

誠一は動かず、玲奈の言いつけを守って受け身に徹していた。

緩くウェーブのかかった髪がサラサラ動き、連動するように乳房が根本からゆったり揺れる。緩慢に上下に波打つ様は、「カップならではの迫力だった。」

「んおっ……締まる……締まるウツ……！」
上下動が始まると、膣の締め付けが強くなつた。吸着が強まればカリで膣を擦る快感が深くなり、肉ヒダはさらに密着してくる。腰が持ち上がる時にも、尻が降りる時にも肉ヒダは肉棒に噛みついて、なかなか離そうとはしない。

カリの下の竿部がすっかり露出する際には、大陰唇と小陰唇が亀頭の境目に吸いついて下側にめくれている。

逆に根本まで呑み込まれた折には、子宮口のコリツとした感触と共に、子宮が亀頭の天井を押ししてきた。体重が乗った圧迫はペニスと膣の一体感を強め、誠一の射精感を膨らま

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

せる。

ギユウギユウ押しながら肉棒にしつこく粘り着いてくる膣ヒダの感触と、濡れ蜜ヒダに研磨される愉悦、最奥までペニスを届かせている実感は誠一の意識を白く霞ませ、同時に、もっとこの快楽を味わいたいという浅ましい欲望を煽る。

「はああ……んああ……ああ、これすごいッ……ッッ」

玲奈も同じらしい。硬く熱く、重量感たっぷりのペニスに内側から押し広げられる感触と、エラの張ったカりに膣肉を擦られる快美、子宮口まで征服されている感覚が、主導権を握っていた美女の態度に亀裂を入れる。

「あああ……この、内側から押されてる感もお……子宮口を突かれるのも……セックスしてるって感じがしていい……もっとわたしで感じて、硬くなって……わたしを感じさせてえっ」

玲奈は、媚声に宿す切迫感を徐々に濃くし、縦の腰振り運動を加速させている。

ペニスにぴったり抱きつく膣ヒダは、どんな愛液を滲ませている。女壺とペニスの密着感が強まって、男女の性器は急速に馴染んでいく。

「ウああ、アア、気持ちいいッ、た、たまんねえ……！」

獣の咆哮めいた声音で本音を吐き出す誠一。膣の締めりは刻一刻と強くなっている。べったり絡みつく肉ヒダとペニスの研磨快感も、どんどん上がり、肉棒は何度もピーンと突っ張っていた。

性器の根本にはグラグラ煮立った射精衝動が渦巻いている。もう次の瞬間にも、白濁液が尿道を駆け上がっていきそうだった。

ブルンンンッッ！　ブルルルル！　ブルン、ブルンッ！

令嬢の歩みのように慎ましかった髪と乳房の揺れは、激しさを増す腰振りに伴ってダイナミックになっている。

軽い髪はポップコーンのように跳ね回り、重量感たっぷりのJカップバストは上下方向にバウンドし、尖りきった乳首が宙空に縦線の残像を描く。

上空に翔ぶ乳房の下乳がでんぐり返り、落ちた時には上乳が胸板とほとんど平行になった。汗の水気を含んだ甲高い打擲音が鳴り響き、振り落とされた汗の滴が輝きながら飛散する。

「アア、出るっ、精液出るッッ、もう出るう

第五・五話 ウブな彼の浮気心

ううウ！」

「いいわよ、ああっ、一杯出してえ、恋人の姉のオマンコに、くっさくてネバネバの若い精液をたっぷり中出ししてエッ！」

玲奈は罪悪感を煽る台詞を蒔きながら、腰振り速度を最高にする。

粘っこい水音と肉がぶつかる音が木霊する中、ふと、誠一の脳裏に微笑する恋人の顔が浮かんだ。生真面目な彼女は不器用な笑みしかできない女だが、そこも可愛い。

罪悪感の針がチクチク胸を突いてきた。

「出すっ！ 美奈の姉さんのオマンコに、精液思い切り出す！ 今、ここで！」

だが、もう止まらない。やめるなど考えられない。

玲奈との情交で射精欲望の権化と化していた誠一は、能動的に動き出した。

大の字の体勢で、腰を思い切り突き上げては引く。

「んあああ、お、奥に響くウ！ お、オマンコがゴリゴリってエ、ああ、い、イクッ、妹の彼氏チンポに突かれてイクウウウウ！」

子宮口を突く度、亀頭の先が子宮口に粘り着く。子宮を押し上げられる快楽が膣内を狭気持ちよくし、硬く膨張した力り首で膣ヒダ

を擦り上げる愉悦を上げる。誠一の頭は悦楽の炎で炙られて、快美を求めて突き上げられる腰の威力が増していく。

玲奈と誠一の呼吸はすぐに合わさった。

肥厚した大陰唇の船底が、上昇してきたペニスの麓と宙空で激突する。愛蜜をしぶかせながら深く繋がった性器同士は快感の微痙攣を起こし、快楽の丈を伝えあう。

離ればなれになる際には、力り首まで引き抜かれた。露出する肉竿はぶっくり膨れ上がり、血管をドクドク脈打たせている。愛液でコーティングされている影響で、鈍い光沢と甘酸っぱい牝臭を放っていた。

限界が訪れたのは、ふたりの性器が宙空でぴったり密着し合った刹那だった。

「はあっ……ハアッ、ああ、出すッ、精液出すッッッッ！」

誠一は叫び、遠慮なく精液を解放した。

ドビユウウウウ！ ドグドグドグドグドグドグウ！ ビュルルルルウウウウウ！

「んハアアッ！ あアアッ、イクイクイクウウウ！ 妹の彼氏に中出しされてイクウウウウウウ！」

玲奈はぶるぶる上半身を震わせ、宙空で静止した。

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】



第五・五話 ウブな彼の浮気心

一方、誠一の尻は、重い着地音を放つてベッドに着地する。

肉棒の半分は玲奈の肉壺に居座り続け、ピーン、ピーンと突っ張りながら精液を噴出し続ける。

射精する肉棒をくるむ膣ヒダは、けたたましい絶頂痙攣を起こしている。膣とペニスの絶頂振動は互いを刺激し、ふたりを何度も絶頂させた。

「アア、熱いッ……すごく粘りついて……！イキマンコにザーメン出されてるうううウウ……！」

お湯のように熱く、ネバナバの精液は恋人の姉の子宮口を冠水させた。あぶれて逆流した白濁は、ペニスと膣壁の密着面へ向かい、膣の微細な凸凹の中へと染み入っていく。

結合部から露出している竿へと伝ってくるに汁は、愛液が混ざっているはずなのだが、ドス白く粘りけたつぷりの精液だけが垂れている風にしか見えない。

「ンアあ……ザーメン……濃いのいっぱい……はああああ……」

玲奈は上体を微かに倒した状態で腰を下ろした。結合部から漏れ出していた精液と愛液の混ざり汁が、男女の股間をびちゃびちゃに

する。

子宮口と触れあう亀頭が精液を吐き出す感触を噛みしめながら、玲奈は気持ちよさそうに口をあの手を開けている。細い肩を上下させつつ、艶やかな吐息を何度もこぼし、悦楽の文を素直に漏らしては総身をぶるりと震わせた。

逆さにぶら下がる肉釣り鐘には無数の汗玉が浮いている。乳肌を潤わせて余りあるほどに発汗しているのだ。女壺が燃えているように熱いことを考えれば、身体も相当火照っているに違いない。実際、大理石のようになめらかな雪肌は、湯浴み後の赤みで染まっている。余った汗の玉は乳肌を滑り、乳首をジャンプ台にして誠一の胸元へと落下している。仄甘い体臭とツンとくる汗の匂いを帯びた雨だれを受ける誠一は、飽きることなく吐精する。

「はあッ、ああ……あアアア……最高だ……ああ……」

挿入しているだけで身も心も蕩けそうな膣内で存分に精液を吐く。

恋人の姉は、粘り若汁を恍惚と受け止めてくれる。

しかも膣内を淫らに痙攣させて更なる射精をねだってくる。

手ほどきスワッピングで墮とされた私【おまけシナリオ】

男でよかった、ペニスがあつて幸せだと心の底から思える時間だった。

こんな多幸福感を味わわせてくれる玲奈には、恋人にも感じたことのない甘い愛しさを覚えてしまう。両想いの女性がいるのに不謹慎だとは、今は思わない。

「ん……はああ……はあ………ンフフ、恋人の姉のオマンコに、たくさん中出しした気分はどう？」

玲奈は悪戯っぽく尋ねてくる。

罪悪感を刺激する台詞も、この時間に浴びせられては、合意を得ている裏切り行為の快感を増させるスパイスでしかない。背徳快感の追い風を受けた誠一は、射精を促すような妖しい膣痙攣の刺激をトリガーにして、新しい粘液塊をビュルツと吐いた。

「アんっ……ふふ、わたしとのセックス、気持ちいいでしょ？」

世の中は広い。玲奈に勝る女、いや牝女はいるだろう。男を虜にする美貌と手管を備えた美女は。

しかし、恋人の姉は玲奈一人であり、今享受している背徳悦楽は彼女と交わることでしか味わえない。

（悪い美奈……お前の姉さんとのセックス、

よすぎるんだ……）

誠一は恋人のことを思い浮かべた。

この奇妙なスワッピング性活はいずれ終わるだろうが、それが一日でも遅いことを誠一は密かに願った。恋人への裏切りだと自覚しているものの、道義心は浅ましい感情を止められない。

「まだまだ元気みたいだけど………またましようか？」

舌舐めずりしながら誘う玲奈を拒絶する理由などはない。

膣の絶頂痙攣は鎮まったものの、精液塗れの膣ヒダは依然ペニスにびったりくっついていいる。包み込まれる肉棒は硬く、高熱を放ちながら蜜ヒダを押し返している。

玲奈から離れられなくなっていることを自覚しながら、誠一は堂々と頷くのだった。

終